
愛の言霊を君に

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の言霊を君に

【Zコード】

N4149Y

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

舞台は光来学校。桜の舞う季節。何処にでもいるような男子高校
生の葵は、同じ委員会になつた雫のことが気になり始めた。いろい
ろ話して雫と仲良くなつていいくつちこ、二人はお互いの秘密や事情
を知っていく。

・・・これは、そんな青年と少女のお話・・・。

登場人物（前書き）

ネタバレあります><

登場人物

○中崎葵なかさきあおい

19歳 男 1-A

これでも主人公。

普段は大人しめだが、男らしくて優しい一面も。
基本マイナス思考・・・かも。

病気で家族を亡くしている。

○咲野翔さくのかける

19歳 男 1-A

明るい皆のムードメーカー。

葵の親友。

昔、恋人を亡くしてしまったことがある。

○一条雲いちじょううん

19歳 女 1-C

お嬢様然とした女の子。

頭の良さは多分中の上くらい。

病気もちで、その治療法は現在も見つかっていない。

第一話 プロローグは始業式

「それでは、級長を決めます。」

ここは私立光来高校。今日は始業式。桜の舞う季節。暖かで穏やかな風が吹いていた。

「誰かやりたい人はいませんか?」

そしてここ一年A組では、今級長を決めている真っ只中である。だが、案の定誰一人手をあげない。

「おい葵ーお前やれよつ。」

突然だが、紹介しよう。こいつは俺の小学校からの親友、咲野翔。
いつもへんに明るい奴だ。そして俺は中崎葵。
校生。一見というのは・・・まあ・・・俺は中学に入学したころ、病気で両親を亡くしたことに関しては少しだけ他と違うかもしれないから。・・・話がそれた。元に戻そう。先ほど翔に、俺が級長をやれと言われたが・・・実は絶賛迷い中だ。やりたいようなやりたくないような・・・やつてもやらなくても後悔してしまうような・・・・・俺のこの気持ちを分かつてくれる人がいると嬉しい。

「翔はやらないのか?」

「え、俺?俺はー・・・面倒だからやんない。」

「・・・・・・・・・。」

・・・やつぱ相変わらず翔はマイペースだ。

「・・・俺、級長やううかな・・・。」

ぼそつと・・・本当にぼそつと呟いた言葉。だけど翔はその言葉を正確に聞き取ってしまったらしい。

「え、まじでっ!?.センサー葵がやるつてさーー!..」

「は、ちよつ、おー!..」

翔が大声でそう叫んでしまったせいで、俺たちにクラス中の視線が集まつた。

「じゃあ中崎。やつてくれるか?」

「・・・・・・・はい。分かりました。」

こつなつてしまえばやりませんとか言えないだらう。俺は肯定の返事を返す他なかつた。まあ、一度そう決まつてしまつたら、何か頭の中もすつきりしたし・・・結果オーライ、といふことにしておこう。

「ついでに今日は委員会があるからな。放課後各教室に行くよつ。」

「

・・・・・・・・・・・・

その先生の言葉に顔をしかめた俺に、翔は机に突つ伏して笑いを堪えていた。・・・翔。後で覚えておけよ。と、いうことで、俺はHしが終わり次第翔に喝を入れた。当の本人は笑つただけで全く気に

していないみたいだが。それにしても学校に登校して一日から委員会とか・・・普通ありえないだろ。

・・・ありえたけど。

因みに翔は委員会はやらないらしい。まあその代りに係りの仕事があるんだけど・・・それも結構簡単なものだし。全くお気楽な奴だ。

そして放課後。今日は始業式のため、授業などもなく午前中で終わった。聞いたところによると、委員会もすぐに終わるらしいので早くいって早く帰ろうと思つ。因みに、翔は教室で待ってくれているらしい。早く終わらせようつて・・・翔があんな大声出すからやる派目になつたんだけどな・・・。

「ここか・・・」

そう呟きながら、会議室というプレートがぶら下がつている教室へと入る。・・・が、来るのが早すぎたのか、まだ誰もいない。まあ、渡されたプリントにはこの場所だと書いてあるし、待つていればそのうち誰か来るだろ。そう思い、俺はしばらくの間この会議室で他の人達を待つことにした。

・・・が、

待つこと數十分。

• • • • • • •

・・・・・ 来ねえな・・・え・・・何これ。これもう帰つても
いい感じか?さすがに、しーんとした教室で一人待ち続けるのはも
う虚しくなつてきたというかなんというか・・・。

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

帰ろう。

そう思って俺が腰を上げると、突然ドアが開いた。

「え。
「あ、やつぱりいた。」
「は？」

入ってきたのは、上品な雰囲気を漂わせた、ビニが儂に感じのする女の子。

「君、委員会で来たんだよね？」
「そりだけど……。」
「今田無くなつたって、委員会。」「……そりなんだ。わざわざありがと。」「ひひこ。それじゃあ。」「あ、ああ……。」

そうしてその女の子は、入ってきたときと同じようになつて行つた。
それと同時にさつきまでの静けさが戻ってきた。さつきの子・・・
リボンが青だつたから俺と同じ一年か・・・。

「…………。」

もう委員会はないと分かったのに、俺はなかなかその場を動けずにいた。そして少ししてからまたガラガラとドアが開き、次いで俺にとつてはもう聞きなれた声がした。

「葵ー遅えよ！！」

「・・・あ、ワリ。」

「つたく、委員会無くなつたんだろ？いつまでボーッとしてんだけつ。」

「だから悪かつたって言つてんだる。」

翔が来なかつたら、ずーっとボーつとしてた……かもな。そんなこともあって俺は翔にほんの少しだけ、感謝した。

「ま、といあえず帰るか。」

「ああ。そうだな。」

そして俺たちは、一度教室へ戻つて俺の帰りの支度をしてから、帰路を歩いて行つた。言い忘れてたけど、俺と翔の家は結構近い。まあそれも手伝つて、翔とは一番に仲良くなつたんだ。

「お前今日は何か用事とかねえの？」

「ああ。今日は何もないけど。」

「そうか。」

因みにこの会話の意味は、『今日は買い物に行かなくていいのか』だ。何せ俺には親がないし、一人暮らしだからな。家事全般全部一人でこなしていかなければならぬ。これが結構な重労働なんだ

よな。翔は俺に両親がないことも知ってるから、たまにだけど買
い物に付き合つてもらうことがあるんだ。まあ翔はこれで意外と氣
の遣える奴だし、なにより俺の両親のこともここまで重く受け止め
たりしないで明るく振舞つてくれるから一緒にいて気が楽なんだよ
な。そんなことを思つていると、突然隣から声が聞こえてきた。

「…まあ、なあ、」

二二二

やつべえ。ちよつと思考が飛んでいた。なんか今日はひこうひど
が多いよつな・・・。・・・。気のせい、か・・・・・?

「お前をいいからボーリーにしすぎじゃね? 何があつたのかよ?」「別」「可むえ。」

「そうかあ？」

俺がそう答えると、翔にめちゃくちゃ訝しげな顔で見られた。でもそんなことを聞かれても、俺にだつてよくわからないんだから答えようもないよな。俺たちはしばらくそのことについて話していくうちに、いつの間にか家の前へとたどり着いていた。

「つと、もー着いたのか。んじゃ、また明日な！」

「お、」

そしてさつきの話題はそのままに、翔はただいまーと言いながら家中へと入つて行つた。俺もいつまでも立つ立つてゐるわけにはいきないので、数メートル先にある自分の家へと歩いて入つて行く。

「つはあ。疲れたな。」

誰もいない部屋の中、一人ごこちる。一人で生活するようになつてからつづくつく思う。今はまだ家族皆で家事分担して家事をやるところも多いみたいだが、昔はその家事全般全部母親がやってたんだよな。やっぱり、世の中の母親は偉大だと思う。ま、俺には関係ないんだけどな。

「…………。」

いつもはこんな何の音も聞こえない静かな夜は、感傷に浸つてばかりだけど。今日は違つた。あの子　　あの俺と同じ委員会だらう女の子のことが何故だか頭から離れない。あの子との会話がさつきから頭の中で何回もリピートされている。何故だろ？、とはもう思わない。家に帰つてじっくり考えて……漸くその正体がわかつた。俺は多分……

あの子に一目惚れというものをしてしまつたんだ

そして次の日。俺はいまだにあの女の子のことが忘れられずにいて、朝もいつもよりもボーッとして過ごした。そんなことしていても何かが変わるわけではないのに。でも、こんな気持ちは初めてだったから。そうなつてしまふのもしょうがないと思うんだ。

まあ、いつまでもボーッとしているわけにはいかないので、さっさと学校へ行く支度をして家を出た。そして、翔の家の前を通り過ぎようとしたところで、いきなり翔が慌てて玄関から出てきた。

「葵ー待てって！！学校まで一緒に行こー」
「あ、おー。つつか今日は起きるの早いんだな。珍しい。」「そりゃあ、今日から本格的に高校生だからな。そんなしょっぱなからセンコーに田、つけられたくないだろ？」「・・・お前でも、そこらへんは気にするんだな。初めて知った。」「うわっ、相変わらず酷え奴！！」

そんな会話を繰り広げているうちに、学校に着いた。結構ギリギリだつたので、教室に入つて十分も経たないうちに担任の先生が来た。

そう、今日はレクリエーション。一曰中だそうだから、授業はない。

なかつた。

「班の紙は前に貼つておくので、ちゃんと見てから行けよ。」

それだけ言つて、朝のH-Lは終わつた。ここらへんこの先生早いからいい。さつそく俺たちは、初めて着る真新しいジャージに着替えた。前の黒板に貼つてある班分けの紙を見てみると、どうやら俺は翔と一緒に来たい。なんて偶然。でも、全く知らないやつらと一緒になるよりかはいいか。気遣わなくていいし。そして俺と翔はしばらく話し合つた後、体育館に行くことにした。

「一班はこっちでーす！」

「五班こっち来てーーー！」

体育館では、それぞれの班の班長さんと思わしき人たちがプレートを持つて立つっていた。体育館にいる人数自体はそこまで多くなかつたから、自分たちの班を探すのにそこまで時間はかからなかつた。

俺と翔の班は七班。

さつそく俺たちはその班の場所に行つた。この班はまだ誰も来ていないらしく、俺たちだけだつた。

「レクリエーションつて、何やるんだろうなー？」

「さあ。ま、そのうち説明とかあるだろ。」

「それもそうか。」

翔と話している間に、どんどん体育館は人で埋まつて行つた。

人数はひと班に約10人。なるべく男女それぞれ5人になるようにしているんだと思う。俺と翔は同じ班に集まってきた人たちに挨拶をした。俺たち七班はあと3人来ていない。女子一人に男子一人。

遅いなと思ひながらも、あと誰が来るのか気になるから少しだけ楽しみにしながら待つていてる。

そしてしばらくしてから、三人が一緒に来た。

「・・・え。」

「ん、葵? どした?」

「いや、ちょっと・・・。」

驚いた。

と言つても、驚いたのも無理はないと思ひ。

「あ、あの時の・・・。」

「なあに、知り合い?」

「うん。おんなじ委員会の人だよ。」

三人のうちの一人は、俺がせつときまで忘れようとしても忘れられなかつた人だつたから。

だからと言つて大して積極的でもない俺は、どうもといつただけでなにもできなかつたが。

それにして同じ班とか・・・どんな偶然だよ。

「では、ルールを説明したいと思ひます!」

頭の中で密かに葛藤しているうちに、いつの間にか全員体育館にそろつたようだつた。

・・・とにかく、失敗だけはしないよ! じょ! じょ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4149y/>

愛の言霊を君に

2012年1月14日23時47分発行